第 21 回 (令和 3 年度) 定例総会は、小名木川の水辺見学を兼ねて

「NPO 江東区の水辺に親しむ会」は、平成 12(2000) 年 1 月から活動を開始しました。総会は今年で 21 回目となります。今年は趣向を変え新会員田中秀一さんの船（夢観月）をお借りして、船上での総会としました。6 月 12 日（土）は越中島船着場から 11 名が乗船、コロナ禍で参加者は少なかったものの、会員総数 92 名の内、委任状を含めると過半数が参加で、総会が成立したことを確認できました。審議は順調に進められ、皆さんの承認を得ることが出来、無事終了しました。

抜けるような青空の下、テーマの臨場感も有りつつ語り合いました

その後懇親の会に移り、小名木川の水辺見学と、意見交換タイムとなりました。普段顔を会せる機会のない会員同士です。参加者は、それぞれ自己紹介をしながら、日頃の活動も話してくださいました。リバーガイドの吉田珪子さんは水辺の景色を説明、同じくガイドの高田光さんはもっとリバーガイドの活躍ができる場面を増やす仕掛けが作れないものかと問題提起をしました。皆で何か手立てが考えられないかと議論が盛り上がり、会としての課題やテーマも皆で考える機会が得られた総会の一日となりました。

理事長 須永俶子

イベント情報

○第 18 回お江戸深川さくらまつり 2022 年 3 月 19 日 (土) ～ 4 月 3 日 (日）東西線門前仲町黒船橋周辺
○夜の水彩カフェテラス　2022 年 5 月 7 日 (土）都営新宿線東大島旧中川川の駅付近

＊＊

宇佐美さんの訃報

宇佐美衛さんが今年の初め、1 月 30 日（土）に天に召されました。病院から「ごめんね。未だ病院に居て理事会に出られない」と連絡くださり、「じゃあ次回よろしくお願いいたします」と答えたばかりだったのです。

我々にとっては全く寝耳に水のこと。自らを悪代官と称し、時間の許す限り水辺の理事会にご出席くださっていました。和船友の会の重要メンバーであり、水辺の会も深く理解し、応援して下さっていて、温かい忠告や苦言を下さっていた大事な方でした。我々はあの人なつっこい笑顔を、忘れることはないでしょう。カーステレオから流れるミッチミラー合唱団の歌を今も口づさんでいるのかな。

＊＊

江東区の水辺に親しむ会 会報「みずべ」38号　発行日／令和3年 12月31日　発行／特定非営利活動法人 江東区の水辺に親しむ会
〒135-0021　東京都江東区白河1-3-13-106　連絡先／Tel.03-5639-2818　Fax.03-5639-2822　http://koto-mizube.org

特定非営利活動法人 江東区の水辺に親しむ会 会報　2021年(令和3年) 12月31日発行

みずべ Mizube Vol.38

おはようがこだまする学校

水彩サロン 2021 年春学期の講演会が 2021 年（令和 3 年）5 月 16 日（日）に森下文化センターで開催された。演題は中村学園、深川に生まれて百十二年、である。この会場は、たかばし・のらくろードの真ん中にあるので場所と歴史に敬意を表して、商店街でのらくろ T シャツを買い着て行った。講演会ではジャケットを羽織って話した。

この 5 月 16 日は、偶然であるが、巡り合いが二つ重なっていた。それは 1909 年（明治 42 年）、今から 112 年前、中村高等女学校開校式が行われた当日である。来賓の大隈重信が「立派なお神さんになる要件について」祝辞を述べたことなど、盛典の記事が翌日の国民新聞に大きく載った。

もう一つは今から 332 年前、1689 年（元禄 2 年）弥生の 3 月 27 日、芭蕉が深川の杉風（さんぷう）の別荘からおくのほそ道へ出立した日である。旧暦を今の暦に直すと、初夏の 5 月 16 日にあたる。

私は大隈と芭蕉二人の眼差しを感じ、上気した頭で三つの間、人間、空間、時間を自由に行き来して、中村スピリッツを巡るほんとうの姿を話そうと計画した。

「中村」の校名は創立者中村清蔵の名に由来する。一貫して深川の地で女子校を営む。この一世紀をこえる歴史を、女生徒・卒業生の明るくしなやかにして、時にはしたたかな証言や手記を引用して、中村学園の実相を伝えた。さらに本校と縁のある与謝野晶子、ヨハネ・パウロ二世など歴史上の 16 名を登場させ、いつどこでどのように本校と繋がっていたかを物語った。

この講演録を「描きかけの自画像」と題し、私家版として、来春 1 月、銀の鈴社より出版予定である。ご希望の方は「江東区の水辺に親しむ会」へ申し込んでください。謹呈いたします。

中村学園　元理事長・校長　小林和夫

左：写真１ 河川法の規制緩和で実現した広島市の水辺のオープンカフェ　中央：写真２ 隅田川沿いの現代版川床「かわてらす」の賑わい　右：写真３ 多くの人びとが行き交う隅田川沿いの遊歩道（2020 年 5 月撮影）

「mizube bar」プロジェクトを契機とした新たな水辺の居場所づくり

日本大学理工学部海洋建築工学科　助教 菅原 遼

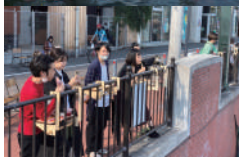
身近な水辺環境の重要性が再認識されてきた昨今、公共空間として整備された水辺空間の「使いこなし方」の模索が全国で進められています。2004年に実現した河川法の規制緩和（河川空間のオープン化／国土交通省）では、これまで利用が限定されていた河川空間において、民間事業者や地域組織による柔軟な河川活用を可能とし、広島県広島市の「水辺のオープンカフェ（写真1）」の実現を皮切りに、全国各地において水辺のまちづくりに資する新たな河川空間の利活用が展開されてきました。江東区の西端を流れる隅田川沿いに設置された現代版川床「かわてらす（写真2）」は河川活用の先進事例のひとつとして挙げられます。背後地のホテル兼飲食店と一体的に整備された川沿いのデッキスペースは、日々、地域の方々が訪れ、日常的な水辺の賑わいの様子を生み出しています。

地域の賑わい拠点として位置付けられ始めた水辺空間は、2020年以降の新型コロナウイルスの感染拡大を契機に、地域住民による水辺利用が加速度的に高まりました。隅田川沿いの遊歩道では、散歩、ランニング、読書等、思い思いの水辺利用を楽しむ来訪者であふれました（写真3）。こうした状況は、在宅生活の中で蓄積された自然環境への欲求が身近な水辺空間へと向いた結果といえるでしょう。今後、さらなる水辺の利活用の地域ニーズが高まることが予想され、水辺の利活用を促進させる仕組みづくりが重要といえます。

こうした動向の中、日本大学理工学部海洋建築工学科・親水工学研究室では、水辺空間に気軽に立ち寄り、水辺の風景を眺めながら、河川沿いの飲食店でテイクアウトした飲食物を味わうことができる空間装置「mizube bar」の地域実装に向けたプロジェクトに取り組んでいます。mizube barは、本来、安全性を確保するために河川沿いに設けられた柵を活用し、簡易的な取り付け・取り外しを可能としたカウンターバー（写真4）であり、水辺の風景を一時的に「飲食の場」「仕事の場」「交流の場」へと柔軟に変化させることを目的としています。

写真４　河川沿いの柵に簡易的に設置するカウンターバー「mizube bar」

さらに、mizube barの設置を起点とした水辺の賑わいづくりを通して、川辺で営業している飲食店舗の立地価値の向上に繋げ、ひいては、水辺の賑わい創出を契機とした地域価値の向上へと寄与することを目指しています。



上：写真５ 大岡川での新たな水上アクティビティ「SUP（スタンド・アップ・パドルボード）」下：写真６ 横浜の地域イベントで使用されている「mizube bar」

mizube barの取り組みは、研究室の活動拠点のひとつである神奈川県横浜市の日ノ出町・黄金町地区からスタートしました。同地区には二級河川・大岡川が流れ、河川沿いには様々な飲食店舗が建ち並ぶ地域となっているため、水辺空間の活用を図る上では非常にポテンシャルの高いエリアです。また、大岡川では、SUP（スタンド・アップ・パドルボード）やカヤック等の多様な水上アクティビティが日常的に行き来しており（写真5）、地域づくりの骨格として水辺空間が注目されています。将来的なmizube barの運用として、沿川店舗に貸し出すことによる地域管理を想定していたため、2020年7月頃から研究室の学生とともに、自治会や沿川店舗の事業者、河川管理者に対して、企画意図の共有と設置に向けた協議を進めていきました。9月には、沿川店舗の事業者や自治会の方々のご協力もあり、大岡川沿いにmizube barを複数基設置することができ、横浜の新たな水辺の風景を生み出すことに繋がりました（写真6）。その後、2020年度には月1回の頻度で地域イベントとともにmizube barを設置し、地域メディアへの掲載も相まって、地域の認知が高まってきたように感じます。

横浜での活動を契機に、mizube barの設置地域は広がりつつあります。2020年度には江東区汐浜運河（写真7）、2021年度には墨田区・東京ミズマチにおいて地域組織や企業とともにmizube barの設置にこぎつけました。

さらに2020年10月には、江東区の水辺に親しむ会・理事の岩田さんにお声がけいただき、隅田川沿いの遊歩道で定期的に開催されている「隅田川マルシェ」においてmizube barを設置させていただきました（写真8）。隅田川沿いに設けられた柵は、他地域のものと比べて高さが900mm程度と若干低く設計されているため、椅子に腰掛けて飲食を楽しみながら隅田川の風景を眺める上で抜群の空間性といえます。また、継続的に開催されている隅田川マルシェは、地域の方々が水辺を「居場所」として認識するための重要な取り組みであり、こうした地域イベントと連携することで、mizube barの地域実装を通して「水辺の居場所化」へと繋げていきたいと考えております。

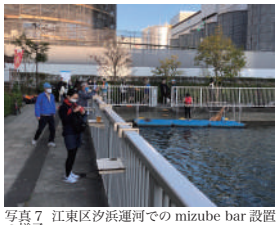


写真７　江東区汐浜運河での mizube bar 設置の様子

江東区は都内でも有数の水際線距離を有しているため、河川や運河は地域住民にとって身近な自然環境となるポテンシャルをもっています。しかしながら、現状の水辺空間は通過動線程度の状態であり、江東区の水辺空間が地域住民の居場所として定着しているとは言い難い状態です。今後は、水辺空間の「使いこなし方」を地域全体として発展させていく必要があり、mizube barが水辺の居場所づくりに少しでも貢献できればと考えています。

写真８　隅田川マルシェの賑わいと mizube bar 設置の様子

連載江東の橋

《その１ 小名木川クローバー橋》　高浦秀明（橋梁設計士）

はじめに

改めて江東の街にある橋を見に行きましょう。運河に沿ってさわやかな川風の中を歩いていくと、あれあれ堅川、大横川、仙台堀川など途中で埋め立てられ、橋も桁下まで埋没しているものもあります。横十間川は運河としては現役ですが、川幅が狭くなっています。最近まで有ったゲルバー形式の橋、清水橋も撤去されてしまいました。（2021年前半に撤去）　橋の計画や設計の立場から見ると大変に残念です。他の橋も近づいて横や下から鑑賞してみると、隣の水管橋などが邪魔で写真が撮りづらい、鉄の部材が錆びている、橋に不釣り合いな巨大なオブジェがある等々。いろいろ気になりだします。東京で残り少なくなった運河と橋。このままでは消えてしまうかもしれません。そうなる前に一旦ここで見直し、現状の報告を連載したいと思います。

エックス橋、バツ橋、ヒトデ橋じゃだめだな。名前がクローバーというのがいい。幸せな感じ。

江東区に素敵な橋は多々ありますが、連載トップバッターは小名木川クローバー橋。場所は小名木川と横十間川の交差するところ。川沿いを歩いてきて青い桁が見えると少しほっとします。四方の眺望が利くのがいい。お江戸日本橋川の一国橋はぐるりの橋が見渡せ八見の橋ともいわれましたが、クローバー橋は現代の八見の橋です。大きな建物と南側の横十間川が行き止まりなのが多少気になりますが、近接して水管橋も電線もなく良いロケーションです。

徳川家康が江戸開発をするのに、徳川幕府開幕以前に着手したのがここ小名木川の開削。天正14年（1590年）。小名木川は行徳の塩その他の物流を運ぶ江戸にとって大切な物流の動脈でした。扇橋閘門と中川の間は、いまでは水面が周囲の川より低くなっており、水位を調節しないと行き来できません。クローバー橋より中川寄りに歩いていくと昔のカミソリ堤防の断面が残っています。

物流の動脈だった小名木川も今では快適な散歩コース。見晴らしもいいし路面もきれい。横十間川の遊歩道はやや歩きにくいし自転車も突っ込んでくるが、小名木川のほうはゆったり歩けます。

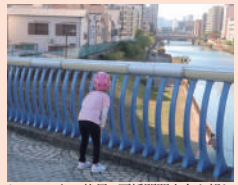
橋全体を眺めると上部工である青い色の桁が2本交差しています。桁の長さは合わせて１４０m。地形の関係上2本の桁の長さは同じではありません。長いほうで約８０m。ちなみに小名木川に直交している他の橋は長さ55mくらいです。クローバー橋は頑丈なのでしょうか。クローバー橋はほかの橋と違い一本棒状ではなく四方に踏ん張っているので大変頑丈です。耐震性もあります。

上部工は鋼製の箱桁で、路面より少し広がり、さらに下面が狭く、そろばんのコマのような断面になっています。基礎工は鋼管矢板基礎と言って護岸の締め切りのような構造です。コンクリートの杭ではありません。四隅に基礎工とその上のコンクリートの橋台をまず造ります。真ん中の交差部分は後から台船で運んできてはめ込みます。鋼桁は温度変化で伸び縮みするので、桁同士をぶつけないように慎重にはめ込んで接合しました。

橋の色も形もシンプルかつすっきりしています。色は区内の橋の定番の暗い灰色ではなく上品な明るいブルー。勾配がややきつくておばあちゃんが自転車を押しながらふうふう言っているのがやや気になりますが、それ以外はいい雰囲気です。

形といいロケーションといい映像ドラマ向きです。

最寄り駅：都営新宿線住吉駅歩10分。平成6年（1994）建設。桁下高＋3．６５m。東北側から時計回りで猿江・大島・北砂・扇橋を結ぶ。



おー、こりゃ絶景。扇橋閘門方向を望む。

一つづく